

地図の想いと地図の機能

国立教育政策研究所
大杉昭英

1. カーナビゲーションがあったならば

もう10年以上も前になるが、家族で九州に旅行したことがあった。自動車で大分県の国東半島を回って別府に行く予定であったが、白杵あたりから山道に入って道に迷ってしまった。キツネに化かされているようにぐるぐると同じ場所を何度も回わり、やっとの思いで別府にたどり着いた。道路地図や九州全図の地図など、道に迷わ

ない準備はしっかりやっていたつもりであるが、まったく役に立たなかった。近道をしようとして山の中に入ったのはよかったです、同じような景色が続き自分の位置を見失ったことが原因であった。自動車で見知らぬ土地を行ったとき、最も困るのは自分の位置が分からなくなることであろう。地形を客観的に示す地図があっても自分の位置が分からなくなると本来の機能を果たさなくなるのである。

しかし、今はこのようなことは起こらないようだ。昨年、北海道の富良野に旅したとき、タクシーの運転手さんからつぎのような話を聞いた。その運転手さんによると、最近はカーナビゲーション付きのレンタカーが流行っており、旅行者の多くはそのような車で観光地を回っているのだという。「そうは言っても、富良野や美瑛の丘を通る道路は複雑で、今走っている道も地図に載っていないので、ナビゲーションが付いていても役に立たず、道に迷って立ち往生している車をよく見ますよ。」

と笑って教えてくれた。カーナビゲーションは地図と自分の位置を同時に示してくれる便利な機械であるが、こうなると形なしのようである。しかし、先の九州旅行の経験は、もともと大学は地理専攻で入学し地図を読み取るのは得意なはずだと自負していた自分にとっては、自信を失わせる事件であった。

2. 島で育った子どもの頃の想い出

そもそも私が地理が好きだったのは、瀬戸内海の小さな島で生まれ育ったためではないかと思う。山が海岸のすぐそばまでせまっており、車で1時間もあれば一周できる小さな島であった。造船所が多く、また南向きの山の斜面で甘いミカンが育つ島でもあった。このように、周りを海で囲まれ閉じられた小さな世界にいたため、島外に広がる世界への憧れがあったのかもしれない。この島を出るとどんな世界が広がっているのか、日本地図や世界地図を見ながら想像していた。地図にあるこの地域はどんなところだろうか、ここには広い牧場があるのだろうか、この川はどこから流れ出しているのだろうか、この山はどのくらいの高さなのだろうか、ここに住む人はどんな生活をしているのだろうかと考え、あそこに行きたい、ここに行きたいと地図上の空想旅行を楽しんでいた。

この頃の島での生活にも様々な想い出がある。小学生の頃には、友だちと山の中に秘密の基地をつくり、(といつても大きな木の根っこにできたくぼみの上にゴザで覆いをかけ、小さな空間を確保しただけであるが)ここを根城に探検ごっこをしたものだ。食べ物や飲み物を持ちよってたわいもないことをしゃべったり、アケビやドングリを探りに行ったりした記憶がある。そのとき、仲間と一緒に秘密基地に行くための地図を作ったり、ビー玉やコマなど当時大切にしていた宝物を隠した場所を示す地図を作ったりして遊んでいた。しかし、この場合、地図というより基地や宝物の隠し場所を示す目印を記した絵と言った方がよいものである……。中学生になると、春休みや夏休みに島の海岸線沿いの道路を自転車で走り、色々な角度からこの島で一番高い山である神峰山を眺めたり、逆に神峰山に登って海岸線を眺めたりして遊んでいた。このような経験が、粘土で島の立体模型を作った

り、日本全土の立体模型を作ったりする宿題が出たときに役に立ち、結構いい作品となっていたようだ。その結果、ますます自分を地理好きにしたように思う。また、自分の住んでいる地域を外から見るとどのように見えるか、日本全体の中でどのような位置にあるのか客観的にとらえることができるようになった気がする。ちなみに、島にあるこの神峰山は、神様が宮島にある弥山という山と神峰山とどちらに降りようかとまよい、結局、弥山に降りたが、そのようなことがあるからこの島の神社は宮島と同じ嚴島神社という名前になっているのだと、子どもの頃島の古老から聞いたことがあり妙に感動した記憶がある。

3. 初めての地理学的な学習

高校になって初めて島から出て広島県の呉市というところで下宿生活を送ることになった。このとき、今までと違う地理学的な学習を経験した。1年生の時であったが、ある日の地理の授業が終了する直前に先生から、「毎日、夕方の6時、10時、朝の7時の気温を1週間記録して提出せよ」という宿題が出された。当時は、何でこんなことをしないといけないのかと訝しく思ったのであるが、クラス全員が記録を提出してみると高校生にとっては思いがけないことが明らかになった。夕方6時、10時、朝の7時用の3枚の地図上にそれぞれクラスの生徒の住む場所を記し、それぞれが記録した温度を降りてくるところや、海岸付近の比較的暖かい所など、呉市の地形に対応した等温線がきれいに出てくるのである。しかも時刻によって等温線が変化することがよくわかるの



帝国書院地図帳より

である。この学習によって、生徒一人ひとりが調査したものを集計すれば、それによって地域の環境条件を明らかにすることができるとともに、それが変化することを知ることができることを実体験できた。地図の上にデータを記入することで、自分の身の周りで気がつかなかつたものを見出させてくれる面白さと、地理とは何かということを教えてくれた出来事であったような気がする。

このような経験を経て、ますます地理が好きになり大学は地理専攻で入学した。しかし、大学2年生のとき政治や経済のおもしろさに惹かれ地理から公民専攻に変わってしまった。現代社会の仕組みや、これから社会がどのように動いていくのかを解き明かし、説明してくれる政治学や経済学の理論への憧れがあったのかもしれない。しかし、子どもの頃から地理が好きだったことが政治や経済の学習に大いに役立った。一筆書きで日本地図や世界地図を書くことができるほど地図を眺めており、さまざまな平野や山脈、川、都市の名称や位置が自然に頭に入っていたため、新聞やテレビで報道される政治や経済の出来事がどんなところで起こっているのかが具体的にイメージできたのである。また、市民革命や政治思想、あるいはケインズ理論、ニューディールなど、抽象的な内容になりがちなものについても、どんな地域で起つたり、生まれたりしたのかなど、その背景をとらえることができたので学びやすかったのである。

4. 地図の機能

大学卒業以後はもっぱら公民中心の仕事を行っているが、環境問題や資源・エネルギー問題、あるいは国際政治や国際経済などについて考える際には、大学生の時と同様に頭の中に地図が入っていると大変便利である。

たとえば、現代の国際社会の主要な問題の一つである民族紛争は、地政学的な観点からとらえることによってその本質をとらえることができるものが多い。公民科の「政治・経済」では、「民族問題」を取り扱う場合に次のような留意点を「解説」に示している。すなわち、世界には多くの民族によって構成されている国家が多数あり、それぞれの民族は独自の言語、文化、宗教などを持ち、その違いや経済的な格差が、時にお互いの反感や差別として結び付いたときに民族問題を発生させていることに

着目するようにと述べている。そして、このような理解の上に立って、民族問題については、少数民族の分離・独立という考え方と、少数民族との共生という考え方とを対照させ、対立と共存という視点から民族問題を考えることが求められている。近年の民族問題の事例で言えば、旧ユーゴスラビア連邦内の紛争が典型的なもの一つとして取り上げができるが、とくにこの地域の民族紛争の問題は、地理的な要素抜きではその本質をとらえることは難しい。

周知のように、旧ユーゴスラビア連邦はヨーロッパの「火薬庫」と呼ばれたバルカン半島に位置している。この半島はヨーロッパとアジアを結ぶ陸路の要地であるため、歴史上いくたびも政治的、軍事的紛争がくり返され、そのたびに様々な征服者によって支配されている。たとえば、ローマ帝国、ビザンチン帝国、オスマン帝国、ナチスドイツなどによってこの半島は支配された。その結果、東西、東北から異なる文化が会う、重層的で多極的な文化圏がこの地で築かれたのである。このことが、たとえば、原康氏が『国際関係がわかる本』で述べているように、「一から七までの国」と呼ばれるほど旧ユーゴスラビア連邦を複雑な国情を持つ国にしたのである。「一」というのは、一つの連邦国家という意味、「二」とはギリシャ文字とローマ字の二つの文字が使われているという意味、「三」とは国内にセルビア正教、カトリック、イスラム教の三つの宗教があるという意味、「四」とは言語がスロベニア語、クロアチア語、マケドニア語、アルバニア語の四つがあるという意味、「五」とはセルビア、クロアチア、スロベニア、アルバニア、ムスリムの五つの民族が住んでいるという意味、「六」とは連邦がスロベニア、クロアチア、ボスニア＝ヘルツェゴビナ、



帝国書院資料集より

セルビア、モンテネグロ、マケドニアの六つの共和国によって構成されているという意味、そして最後に「七」とはユーゴスラビア連邦がイタリア、オーストリア、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、ギリシャ、アルバニアの七か国と国境を接しているという意味である。

このような複雑な国情を持つ旧ユーゴスラビア連邦では、東西冷戦の終結後、ソ連の崩壊とマケドニアの独立があり、その後、民族紛争が勃発し激化していった。この民族紛争について具体的に考えてみよう。先に、言語、文化、宗教などの違いや、経済的な格差が、時にお互いの反感や差別として結び付いたときに民族問題を発生させていると述べたが、ここ旧ユーゴスラビア連邦においても、言語、文化、宗教の違いや東西の経済格差によっ

て紛争が起こったと考えられている。たとえば、経済格差について見ると、比較的豊かな西のスロベニア、クロアチア共和国の富が連邦政府を通して東のマケドニア、モンテネグロ共和国に配分されているという不満が、冷戦終結によって噴き出したと言われているのである。こうした民族紛争の要因や背景は、文章を読んだだけで頭の中で整理することは難しい。バルカン半島はどこにあるのかはもとより、地政学的に、この地は古来より重要な地点であったことなどは地理的な位置が頭の中にはあって初めてわかることがある。さらに、言語、宗教、経済発展の違いを地理的に示す主題図をもとに考察することにより理解を深めることになろう。



帝国書院地図帳より

5. これまで振り返って

こうして見ると、私の地理あるいは地図とのつながりはどうも地理学や地図の系統発生の過程を固体発生的にたどっているように思える。

私の地図とのつきあいは、秘密基地への道筋や宝物の隠し場所を示す絵図からはじまっている。ここに何がある、あそこにはこのようなものがあるといったことを1枚の絵の中に示すことにより、子どもながらに自分を取りまく空間的な要素に秩序を与え、仲間にも利用できる

ように空間を概念化したのではなかっただろうか。また、自分の住む島を観察対象として、物的環境、地形、道路など、景観を構成する要素をつかみ、地図化していくのではなかっただろうか。さらに、移動するもの、変化するもの（等温線）をとらえる地図を作成する経験を得たのではなかっただろうか。現在は、もっぱら人口、資源、言語、宗教、民族などさまざまな項目によって作成された主題図をもとに、現代社会の諸問題を考えているように思う。そう考えてみると、学校で使う「地図帳」を、常に傍らに置いておく必要があるのかもしれない。